

## 糸を撚る紡錘車



### ●コレクション・データ

時代 弥生時代中期  
調査 唐古・鍵遺跡第24次調査  
発見年 1986年  
大きさ 直径5cm、重さ17.1g  
展示位置 第2室「糸を紡ぐ」

弥生時代に伝わった技術の一つに機織りがあります。ただし、機織りの道具や布、糸が出土することは稀で、主に糸にするための紡錘車と呼ばれる紡錘の一部から機織りの一端を知ることができます。

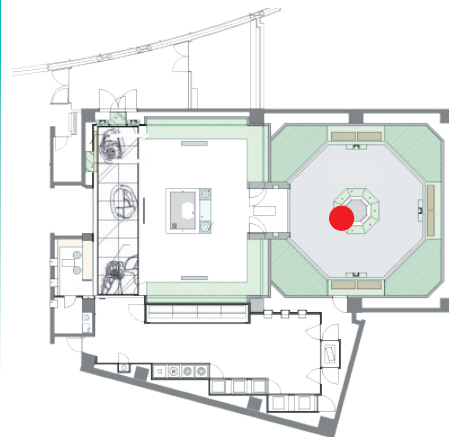
紡錘とは、回転運動を利用して糸に撚り（よ）をかけるもので、糸を巻き取る紡錘と、はずみ車の役割を果たす紡輪（ぼうりん）（紡錘車）によって構成されます。紡茎は木製のため腐ってしまうケースがほとんどですが、東大阪市鬼虎川遺跡では、紡輪に紡茎を差し込んだ紡錘が出土しています。紡錘車は、その中央に、紡茎を差し込む穴があり、直径4から6センチの円盤形を呈します。

唐古・鍵遺跡からは、土器のかけらを利用した粗雑な紡錘車が多量に出土し、数は少ないですが精巧な仕上げをした土・石・角・木製の物も見られます。写真の紡錘車は、鹿角の根元を輪切りにし、薄く丁寧に磨き上げた精巧な仕上げが施されています。

さて、糸に撚り（よ）をかけるには、まず紡茎の先端に糸をかけ、糸で紡錘を吊り下げます。右利きの場合左手で糸を持ち、右手で紡錘車を回転させます。紡錘車の回転が糸に伝わり、左手で押さえた部分まで糸に撚りがかかります。好みの強さに撚りがかかったら、出来上がった糸を紡茎に巻き取り、後は同じ作業を繰り返します。

こうした方法は、菱川師宣の「和国百女」（江戸時代）にも描かれており、古代以降にも、紡錘を使って糸に撚り（よ）をかけていたようです。また、紡錘車にはさまざまな重さがあり、軽い物は細い糸、重い物は太くて丈夫な糸や紐を撚るのに使われたと考えられています。このように、紡錘車の重さは多様な糸の生産を表しており、さまざまな場面で使われたことが想像されます。

このような資料からも、唐古・鍵の弥生の人たちの繊細なモノづくりを垣間見ることができます。



ミュージアム上面図と展示位置